

## ⑧ すまひの記

## 相撲の私記

成田峯雄

寛政三年六月十一日、吹上にして相撲御覧の事有り、兼ておなじつらなるものども、公事のいとまに見侍るべきよし、御ゆるしかふむりて、朝のほどより御見物かたに参りつとふ。抑久かたの雲井（皇居）の庭にして、としごとにすまひのせつ、行れしも、保安に中絶、保元にふたたびおこされしが、其後は又絶て聞へず。たけくいさめるもののふのうへに、便あればにや、鎌倉右大将家の頃、専ら司位有も無も、高きいやしき別ためなく、力をくらべ、明暮のたはぶれ草とせしより、室町家の時なども、御覧のことありしとぞ。しかあれど、星うつり物かわりて、ことり使などいふことも聞へず、葵・ゆうがほのかざしも絶しより、今様は、四本のはしら、土俵などいへる物さへいできたりて、いにしへのことはかわりたる。そのはじめ、最手といへるも、今は大関と名をかえ、助手は関わきとなへ、こむすまひと称するをあわせて三の役とし、それより前頭、まくの内、まくの下、三段、四段、五段ほんちう・あいちう・前すまひと其品をわかち、憤鼻禪はまわしとよび、すまひのおさは行司といい、弓・弦・扇の三くさを四本の柱にゆひつくる。皆有りふる定となれり、その名とも見きくままにしるしつげたるべし。今日空くもりなく、常盤なる松がえ見渡し、

## ⑨（中略）

「是より三役」と称せり。行司

木村庄之助、こむすび九紋龍は、まだわらはのさまながら、すぐれて丈たかく、少し心ぬるきやう也。柏戸は姿かたちとのひ、合きやう（愛嬌）有て、こゝろきゝたりと見へ、つまとり差寄て、四手にくみ、土俵際へをしづめたり。庄之介柏戸が方へうち（わ脱力）さへげ、「こむすびの職にたへたり」と賞して扇をさづく。かのをせたるわらはの鼻白める、うしろ手ほい（本意）なげ成り。関脇東の陣幕に雷電とて、此頃成かみよりもひゞきわたれるをあはす。立合様に陣幕はやく雷でんがのどへ手をかけ、「のどわづめ」といふ手して、只一度に、土俵へ押つめたり。此ほどの内どりに、いくらの相撲に立合ぬるも、とどこほりなく勝ぬるを、思ひの外にもあるかなと人云。「今日の関脇にかなへり」とて、弦を陣幕にあたふ。しばしたためらひて、追風善左衛門、遠つおやの、内裏より賜りし唐衣四幅の袴といへるものをき、師子王といふ団扇の世々伝へたるを持、ねり出たるおもゝち、先ゆへありと見ゆ。土俵の中央ばかり、少し後によりてたつ。左右より小野川・谷風ゆたかにあゆみ出、御物見のかたを拝し、土俵に入り、左右に立ならぶ。今日の御覧は是をむねと、上中下さざめきたつ。左にかたふとし、右に心ひくも有り。六十余州にゆるされたる手合なれば、これに越たる物見有べしとも覺えず、ゆすりみちたるに、行司さしかまへたる団扇の下より、小野川、谷風にとりかゝる。追風左右をとりは

なちて、団扇いまだひかず、声も懸ざるに、取かゝりたる

ことはり無しとて、しきりにさえぎり、ふたゝび召合

す。しばしためらひて団扇引声とゝもに、西の谷風

ふと寄て、はねたれば、小野川とりあふに不及、ふた

あし三足たぢろぐと、追風、谷風に団扇をあげ、

「けふの関にかなえり」とて、弓をさすく。谷かぜ先のつよみ、

小野川後のよわみとて、勝負決せるなりとぞ。哀たに

かぜがおさめの手、出したらんには、山をも抜つべきを、かく

てはことゆかぬこちしたれど、野見の宿祢が蹶速

をうしなひ、畠山庄司次郎が、長居を絶入せさせし

やうなるよりも、事がらうるはしく、さて有べき

にやあらん。谷風、弓をうけ、うやまひさゝげ、四方にふり

廻しなどし、打かたげ拝して入ぬ。此弓を給ることは、

織田内府の近江の国常楽寺にして、宮地と

いへる強力を、関にて相撲見給ひし時、勝たるを賞して

給へるより、今にかくなんといへり。

勝かたに 今日給はれる 梓弓

元の俤なる 例をやひく

(後略)

寛政四壬子年初秋四奠写